

り、跳び越えることもある。

— 喪を拡大することは、被害者との関係が母親とか息子といった理論上の関係より、これまでの関わりの持ち方やこれまでのコーピング方法が影響する。Feinberg によると：

別離の際の対処の成功・失敗が、次におこることに対応する力に影響を与える。しかし、過去の痛みを明らかにし、将来がコントロールされるなら、別離の危機は適応する機会となる。

殺人の後の完全な喪や癒しの体験は、遺族を「新しい普通の」人とし、将来の変化に対処する力となる。

D-12 喪失

殺人による死に伴い、遺族は様々な喪失を体験する。それは複雑であり、ある意味では個々の喪の体験とは区別される。喪失には次のことが含まれるが、それだけでははない：

- ・ 身近な人の喪失
- ・ 役割の喪失—人生において果たしていた重要な役割の終結。例えば：一人息子を失った母親は、母親ではなくなる。
- ・ 今まで知っていた世界の喪失：世界は突然恐ろしい場所になる。
- ・ 家族や自分を護れるという自信の喪失
- ・ 家族や自分を護ってくれる警察や権力への信頼の喪失
- ・ 警察、刑事司法制度、メディア、医療の専門家が冷淡であったり、不適切であった場合、遺族は専門家や社会全体への信用を失う。
- ・ 長年に渡る関係の喪失：加害者が身内の者だったり親しかった場合、遺族は信頼感を失い、愛したり、好意をもっていたり、面倒を見ていた人との関係を失う。
- ・ 健康を失う。

たいていの遺族は命日や誕生日や特別の休日などに鬱状態になる。この鬱の時期には心身共に悪く、睡眠障害や他のストレス症状などがおこる。自殺や病気の進行やアルコールや薬物中毒を引き起こす急激な鬱を体験する遺族もいる。

- ・ 経済的安定の喪失 — 様々な理由で経済的に苦しむことも多い。

理由：

- 亡くなるまでの医療費
- 損害（強盗、放火など）
- 裁判に関わる費用

- 埋葬費
- 被害者の収入
- 遺族の収入の減少
- 遺族の治療費
- その他

遺族の喪失は様々である。様々な喪失について認知していることが、喪のプロセスを助けるために重要である。

D-15 紹介のためのアセスメント

次に示すのはグループにメンバーとして受け容れるか否かの判断をする助けとなるものである。サポートグループに参加する他に、親切で穏やかに専門家の助けを得られるようにすすめる。

最初の会合で心に留めて置くのは、自他を傷つける可能性についてである。注意をするいくつかのカテゴリーがある。第一に自殺念慮である。自殺念慮や行動はすべてサポートグループに関わる専門家の助けが必要である。自暴自棄になっていたり引きこもりがある時も注意しなければならない。これには、衛生状態、働くこと、人間関係、社会行動の悪化がある。最初に注意しなければならないことのもう一つは、身体的な負傷や精神的な虐待を他の人にしていないかという質問をすることである。自他を傷つけるおそれは一連のサインがある。完全にグループから除外するという意味ではない。サポートグループを十分に利用するために専門家の助けが必要だということである。

次に、言動における妄想、幻覚、支離滅裂さによる損傷はないかみなければならない。

妄想の例は「邪悪な力」によって被害を受けているという考えである。幻覚は聴覚によくおこる（現実にはないものを聞く）。支離滅裂な話ということと、言葉がはっきりしないということがあがる。混乱した行動というのは、起床や衛生管理や仕事の方向性をみるなどの決まり切った行動ができないことも含む。

最初に会った時、これまで書かれたことが見られたら、専門家の助けが必要である。

様々な鬱は劇的な喪失に対処するなかでよく起こることである。見なければいけないのは、その人が生きていく中でふつうに取り組む対処する力があるかということである。楽しい事への興味の減少、体重の顕著な増減、睡眠障害、睡眠過多、食欲、活力の喪失、無価値感、異常な罪責感、集中力の減少、決断できるかどうかについて質問する。通常の喪と病的な鬱の区別は難しいが、もし気分障害が仕事や社会行動に支障をきたすようであれば、専門家の助けが必要である。

他の判断材料として、過度の不安や強い恐れという兆候がある。過度の不安はパニックアタックという形になる。パニックアタックは店や高い所やエレベーターなど特殊な場所でおこる。あるいは家を離れているという不安や居心地の悪い場所。不安が大きくなるような場合は紹介が必要である。

身体的な苦痛も深刻である。偏頭痛から筋肉痛、胃痛、胸痛などである。身体的な苦痛がみられたら、医師に紹介すること。

アルコールやドラッグなどの濫用という心配もある。アルコールやドラッグは、困難な時期にコーピングする一つの方法にすべきで、サポートグループに加えて、専門家の特別な治療の助けが必要である。

会合に数回参加するようになってからよりも、初回の方が健康そうに見えることがある。心理状態があまりに深く急激に悪化して取り返しのつかないダメージを与えることがあることを心に留めておくこと。グループのメンバーの福利を守ることを第一に考える責任がある。既に述べたような不安、恐れ、動揺、鬱などの症状はトラウマや喪のプロセスでの対処としては平均的で予期されたものである。生活上苦痛が顕著な時には、専門家の援助が必要である。

あまり厳格にならないこと、必ずしも心理セラピストに会ったりグループのメンバーになる必要はないということを心に留めておくことが重要である。サポートグループと同時に短期間の治療的カウンセリングで大きな助けを得る人は多い。グループからの助けを得る前に、個人的な心理セラピーを必要とする人もいる。妄想や幻覚を経験する人である。

リーダーは、診断のためだけではなく、遺族の必要とするものを見極めるために、地域の専門家と連携をとることが必要である。専門家はグループ全体と個人に治療やアセスメントをするために一緒に働くことを期待している。グループはこの時期に大きな助けやサポートとなるが、充分ではない。グループが皆を「治療」できると思っはならない。グループは喪のトラウマを自分のやり方で行う人の助けとなる。しかし、そのやり方にそって専門家の助けを必要とする人もいる。